

## みちのく潮風トレイル〜種差海岸ルートの花々〜

環境省が東日本大震災の復興支援としてすすめた「みちのく潮風トレイル」青森・岩手・宮城・福島の4県28市町村の既存の道をつないだ、日本最長のトレイルです。6月下旬にその中のJR八戸線の鮫駅から種差海岸駅までの種差海岸ルートを歩いてきました。海岸線を9キロほどのルートですが、北限植物と南限植物がとなり合い、海岸の植物だけではなく、草原や高山の草花が沢山咲いていました。街からそう遠くないところに、多様な植物が共生しています。潮風に吹かれながら、たくさんの草花に癒されるルートです。今回見られたお花は、スカシユリ、アサツキ、ニッコウキスゲ、キリンソウ、ハマボス、キタノコギリソウ、スナビキソウ、ハマヒルガオ、ノハナショウブ、コケリンドウ、ハマエンドウ、エゾノレンリソウ、フナバラソウ、ハマニガナ、ハマナス、エゾフウロ、エゾノカワラマツバ、アカネムグラ、ツリガネニンジン、ミチノクヤマタバコ、クサノオウ、カラマツソウ、コバギボウシ、ヒメヤブラン、ハマゼリ、イブキボウフウ、オオハナウド、オオヤマフスマ、セイヨウミヤコグサ、ナワシロイチゴ、クサフジ、ノビル、ウツボグサ・・・とにかく多様な植物が咲き乱れていて驚きました。三陸復興国立公園の北の玄関口である種差海岸は景勝地としても魅力的で、数多くの文学作品の舞台にもなっています。季節を変えて、又訪ねてみたいトレイルルートです。

川北紀子（千葉市）



潮風に吹かれながら、お花畑を歩いていきます。

ハマヒルガオの大群落が続きます。





ニッコウキスゲとノハナショウブが競い合うように咲いています。

スカシユリ、アサツキ、キリンソウ・・・色とりどりのお花が咲いています。



エゾノレンリソウ



フナバラソウ

## 身近なドクダミ 意外と知らないその事実???

指導員の H さんから「ドクダミを調べておりましたら、身近な草ですのに書いてあることがまちまちで驚きました。」と資料をいただきました。ポ〜っと生きてきた私はとても驚いたので、是非皆さんと一緒に共有させていただきたく、了解をいただき、お忙しい H さんに代わって投稿いたします。

以下その資料

<p>原色日本植物 図鑑 松江の花図鑑</p>	<p>花は長さ 1~3cm の花穂につき、その基部に 4 枚の白色花弁様の総苞がある。花は両性で花弁はなく、雄しべは 3 本。子房は上位で 3 室に分かれる。</p>  <p>雄しべ 3、花柱 3、 果序 <b>種子</b>(長さ 0.4~0.6mm)</p>
<p>ウィキペディア (Wikipedia)</p>	<p>本来の花には花弁も萼もなく、雌蕊と雄蕊のみからなる。1 つの花には、先が 3 裂した雌蕊が 1 個と、3 - 8 個の雄蕊がある。<b>果実はできず</b>、花弁のように見える白い総苞は、<b>何のために美しく見せているのか理由はよくわかっていない。</b></p>
<p>花の声 (多田多恵子)</p>	<p>日本ドクダミはたいがい <b>3 倍体</b> で単為生殖をするので、虫の助けは不要である。こうして<b>手間なく種をつくる</b>上に地下茎を伸ばして広がるので、狭い庭は忽ち占領されてしまう。東南アジアには 2 倍体の系統があり、日本でも四国の一部に 2 倍体がある。単為生殖を行う 3 倍体植物にはセイヨウタンポポ、エゾタンポポなどがあるが、3 倍体植物がすべて単為生殖をするわけではなく、タネをつくらない場合も多い。</p>
<p>さらっとドヤ 顔できる草花 の雑学(北嶋廣 敏)</p>	<p>ドクダミのなかには<b>三倍体</b> (3 セットの染色体を持つもの) のものがある。日本のドクダミがそうであり、三倍体のドクダミは昆虫が花粉を運んでくれても、受粉しないので種ができない。日本の三倍体のドクダミは受粉・受精をせずに種をつくっている。そうした方法を「単為生殖」という。<b>ドクダミは昆虫を誘引するためニセの花びらをこしらえたのだが、単為生殖をする三倍体のドクダミにとっては、それは無駄なことである。</b></p>

牧野富太郎植物記2 野の花2 (あかね書房)	<p>ドクダミの花は、見た目にはなかなか美しく、西洋人がこの花を名花とよぶのももっともですが、じつはこの花は、花としての役目をじゅうぶんはたしていないのです。</p> <p>おしべの粉ぶくろ(葯)には<b>花粉が入っていますが、しなびていて役にたちません</b>。一方、めしべのほうも大きなたねぶくろ(子房)をもってはいますが、いっこうにたねをつくりません。<b>たねができてもしいなばかりで、発芽しません</b>。(?)</p> <p>このため、ドクダミは、たねによって繁殖することができず(?)、もっぱら地下茎を広げて繁殖します。地下茎は白い円柱状のもので、これが地中にのび、さかんに枝分かれし、いたるところから茎を立ててはびこります。</p>
植物観察事典	ドクダミの雄しべは3本であるが、 <b>しおれて花粉は出来ない</b> 。(?)花粉に関係がなく種子ができる。いわゆる <b>単為生殖</b> を行うために不稔性のものがなく、 <b>すべて結実</b> する。
園芸植物大事典	受精せずに種子をつくることができる。
A 大学ホームページ	ドクダミは花といっても実際には雄蕊と雌蕊だけで、花弁はなく、 <b>種も出来ません</b> (?)。繁殖は、もっぱら地下茎による栄養繁殖による。
B 大学論文	・・・本実験で多く <b>発芽</b> した(埋土種子の)種は、ドクダミ(409 個体)、カタバミ(212 個体)・・・ (注)ドクダミ種子の発芽を確認している。

**八重のドクダミ**：一般的に、八重咲きの花は雄しべや雌しべが花弁化したものとされるが、**ヤエドクダミの場合は花弁ではなくて小苞**が大きくなったもの。ということは、小苞とセットとなっていた雄しべや雌しべがどうなってしまったのかが気になるところである。花を横から見ると、**雄しべや雌しべが多数の(小苞由来の)総苞片の間にちゃんと存在することが確認**出来る。



### ドクダミの小花

花はふつう雄しべが3個で、これと花柱が3裂した雌しべからなる。手前側の基部に小さな**小苞**(矢印)があるのが確認できる。



以上がHさんからの情報です。

皆さん、何かご存知の事ありましたら、是非教えてください。

渋谷孝子(流山市)

## クロコノマチョウ

涼しい雑木林の中を歩いていたら、ふいに足元から飛びたつた蝶か蛾がいた。アゲハほどの大きさだ。2m程の止まったあたりを観たが、確認できない。近づくと足元にいたらしく、また飛んで止まった。クロコノマチョウだ！ 枯葉と見分けがつかない。その後、幼虫の姿を観てこの虫が忘れられなくなった。

顔は黒ウサギ、粗い毛が生えている。体は鮮やかな黄緑。蛹も鮮やかな黄緑で先はスカイブルーだ。長いアンテナのような耳(突起物)は何のため？ そして、小さな2cmほどの蛹から大きな枯葉色の成体に生まれ変わる。クロコノマチョウの変身ぶりにまったく驚かされる。

もともと南日本のチョウだったが、1980年頃から関東でも観られ、近年東北へも進出しているようだ。幼虫はシュズダマやヨシなどの稲科の植物を食べる。秋に生まれた成虫は越冬するので冬でも観られる。

山下美佐子 (東金市)



7月撮影



11月撮影



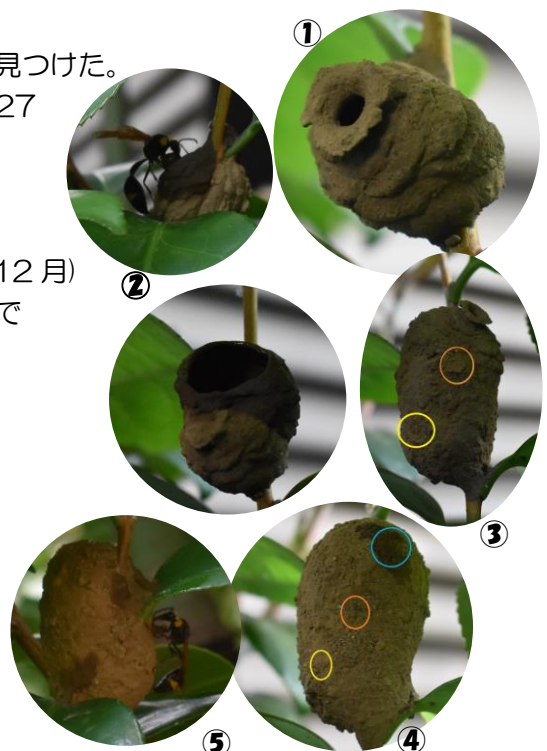
2月撮影

## スズバチ

- ① 2020/6/24 ツバキの枝に大きなトックリバチの巣を見つけた。
- ② 6/26 スズバチだった。入口が塞がれ次の部屋完成 6/27
- ③ 7/4 入口塞ぎ新しい部屋完成 7/5
- ④ 7/11 に3つ目の部屋入口が塞がれ完成
- ⑤ 7/19・7/20 手直し作業をしていた。
- ⑥ 物置の壁に作りかけの部屋があるスズバチの巣をみる(12月)
- ⑦ 2021/5/22 大草調査でスズバチが見られたというので物置の壁を見るが5/30 穴は開いていなかった。
- ⑧ 6/6 穴が開いていた。
- ⑨ 6/9 さらに穴が開いていた。
- ⑩ 最初の巣 6/26 一番上に穴が開いていた。

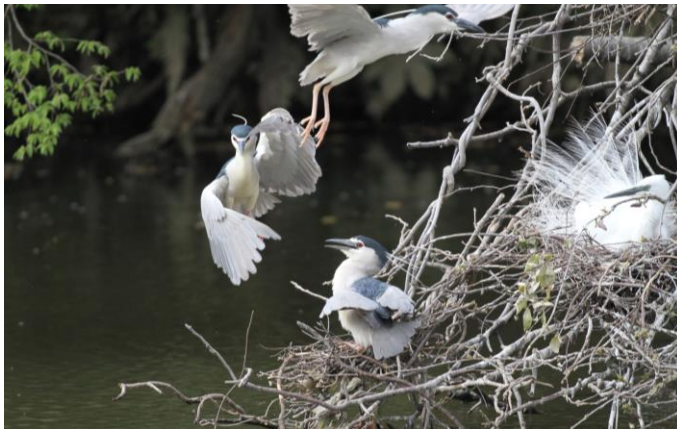


松本美千代 (千葉市)



## 不倫にコソ泥 サギの山

千城台野鳥観察園は千葉都市モノレール千城台駅から歩いて5分ほどの近さです。住宅地の中の調整池とおむすび山と呼ばれる雑木林が組み合わさった環境です。ここではゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギが集団で営巣していて、ペアリングから、巣作り、産卵、雛の巣立ちまでの一部始終が水平目線で観察できます。撮影には願ったり叶ったりの上、交通の便も良いことから、私も20年以上通って撮影しています。撮影中に凶鑑にも書かれていない生態を見る事も色々あって、私にとっても有難い学びの場です。この野鳥観察園の生き字引は地元にお住まいの指導員の和仁さんで、園の開設から係り 現在も頻繁に観察していますから、過去の事から最新情報まで何でも教えてもらえます。近隣住民の散歩コースにも利用されていますが、彼らのサギについての話題では首を傾げる様な珍説が聞こえてきます。そこで市に提案して簡単な解説パネルを設置してもらいました。写真は私が提供し、解説文は和仁さんの観察記録を参考にしたものになっています。さて、次に撮影中に見た面白い生態のいくつかを紹介します。



ゴイサギのペアの雄が巣材を探しに行っている留守中に別の雄と交尾する場面を目撃したことがあります。右の写真その場で、一番下が雌、真ん中が追い払っているペアの雄、上が逃げる侵入者の雄です。右側のダイサギは我関せずとばかり騒ぎを見守っています。侵入者を追い払ってしまえば、すべて解決。ペアの関係が壊れる事はなくその後も平然と巣作りが進行されていました。専門家の遺伝子調査によれば、ある種の野鳥

では生まれてくる雛の何割かは両親となる遺伝子を持つそうですから野鳥の世界は不倫も珍しい事では無い様です。



次の話題です。巣は産卵前に完成するものと思っていましたが、実際は抱卵中も子育て中も補強を続けるので巣材集めは大仕事です。水面に浮いている枝を拾うのが多く、地面に落ちた枯れ枝や立ち木の枯れた枝を折り取る事もあります。時には生木を折ろうとして悪戦苦闘することもあると笑ってしまいます。(写真は巣材を運ぶダイサギ) 良い巣材のある場所を見つけると何度も往復して運ぶので、次の行動が予測でき撮影は難しくありませんが、運ぶ方は大変な作業になり

ります。手っ取り早くするには近隣の巣の主が油断している際に失敬することです。集団繁殖地では首を伸ばせば届く至近距離に隣の巣があるので、出来心を誘発するのでしょうか、こんな不心得な行動を目にするのも珍しい事ではありません。勿論巣の主が気付けば反撃しますから、何やかやと賑やかで見飽きません。話題はまだありますが紙面が尽きました。(佐倉市 坂本文雄)

## 北の国だより

梅雨の無い北海道では、6月も晴れの日が続いています。30度近くまで気温が上がる日もあるのですが、日陰に入ると涼しく感じます。コロナ禍で、北海道自然観察協議会主催の自然観察会は自粛が続いていますが、まん延防止措置が解除されれば、少しずつ、再開したいですね。 (佐野由輝)

### 防風林は湿性植物のレフュージア

北海道の景観的特徴は、広大な牧場や畑。1農家当たりの耕地面積は、全国平均が約1haであるのに対し、北海道は20haを超えています。こうした広大な耕地にとって、最大の敵は風です。北海道では、田畑や牧場を囲むように格子状に長大な防風林が設置されています。

作物を守るために作られた防風林ですが、生物にとっても、意外な効果があります。北海道に広がる耕地の大半は、元々は湿原地帯でした。耕地化されれば、湿地性植物は生き延びることができなくなるのですが、残存する防風林がこうした植物のレフュージア（避難場所）となっています。

耕地防風林は、自然観察会のフィールドとしても使われています。



エゾカンゾウ

### 木死すとも森は死せず

昭和29年（1954年）、洞爺丸台風が北海道に上陸し、道内各地の森林が甚大な被害を受けました。特に、支笏湖周辺の被害はすさまじく、天然林のエゾマツなどの木のほとんどがなぎ倒されてしまいました。その後の地道な造林事業により、今では、青々とした緑が戻っているのですが、1区画、洞爺丸台風以降、一切手をつけずに放置している試験区があります。

そこで、洞爺丸台風以降、65年を経過し、どのように森林が回復しているかを見に行きました。すると、まだまだ細いながらも、天然更新したエゾマツ、イタヤカエデ、ミズナラ、ホオノキが林立しており、見事に森林が蘇っていました。思わず、自然の再生能力の高さに感動しました。「木死すとも森は死せず」ですね。



### ササの一斉開花のその後

昨年の7月1日号の記事でも書きましたが、昨年、北海道各地でクマイザサの一斉開花がありました。竹や笹の花は60年に1度あるいは120年に1度咲くという言い伝えが残るほど、珍しい現象です。

今年、一斉開花から1年経過して、どのような状態になっているか、見に行きました。すると、葉っぱは枯れて、残っておらず、かろうじて立ち枯れ状態の茎が見られるだけでした。そして、ササが独占していたエリアを覆うようにツタウルシが繁茂していました。



令和2年7月



令和3年7月